

裏の土の植物たち

松本 俊彦 京都市京都市 五十四歳

マンションに住んでいる。マンションはだいたい、上階の方が値段が高い。上階の方が価値があるということなのだろう。しかし、購入する際には、初めから一階と決めていた。理由は、わずかだが裏に土があるから。庭というほどの広さはないが、洗濯物の干場に土がある。そこに植物が植えられる。今は、山椒、あさがお、オクラ、ミント、ねぎ、ゴーヤーが植わっている。何年か前に植えたシソは、それ以来植えていないのに自然に生えてくる。大きくなりすぎて切り倒したびわも、いまだに新しい芽が出てくる。肥料なんてやっていないのに、陽当たりがいいせいか、みんな元気だ。やはり、植物はいい。うるさくないし、花はきれいだし、食べられるものもあるし。しかし、最も惹かれるのは、動かないようできて動くところ。植物は、確かに成長しているのだが、じつと見ても伸びてはいかない。しかし、昨日と今日とでは、確実に違っている。確かに伸びている。そこに、人間と共通するものを感じる。自分の成長も自分ではわからない。おそらく、他人からもわからない。しかし、昨日と今日とでは、おそらく何かが違っているのだと思う。昨日できなかったことが、今日ではできるようになっている。昨日は一時間かかったことが、今日は三十分でできるようになっている。きっとそうだろうし、少なくともそう思いたい。裏の土の植物たちを見ていると、そんなことを思う。